オンタリオの農村で

国際農友会一九八一年カナダ派遣農業実習生

内田敏幸

昨年二月、未だ冬景色のトロントへ降り立ったときから、私の一年間のカナダ生活が始まった。日本から飛行機で十三時間の地トロント。そこからさらに東方、ゼネラル・エレクトリック社やチャンピオンシップショウで知られたピータボロの郊外、キーンという村にある酪農家が、私の実習受入れ先である。

農家に落ちついて、最初に受けた印象は、何と豊かな所だろうということだった。道々の車窓からは、ゆったりと起伏をくり返す広大な畑や絵本から抜け出したような家などが眺められた。それらはまだ雪におおわれていたにもかかわらず、私の頭の中には、すでに春の陽差しの下で緑が輝いている光景が思い浮かんだ。

人々の生活ぶりは、この自然の豊かさに劣らなかった。快適なセントラルヒーティング、種々の家庭電化製品、そして、体重を気にしながらもついつい食べ過ぎてしまったおいしい食事、などなど。カナダを訪れる以前に想像していた、開拓時代さながらの農村生活とは遠くかけ離れたもので、その時の私に、少しばかりの失望と大きな満足感を与えたものだった。

しばらく過ごすうちに、私はちょっとした疑問にぶつかった。それは、人間は得てして恵まれ過ぎていると堕落してしまうが、ここの人達もこの豊かさに溺れてしまう心配があるのではないかということであった。

しかし、私は、すぐにこの考えを改めた。なぜなら、簡単だと思っていた畑の耕作ひとつをみても、実際に取り組んでみると大変な仕事だったからである。大型機械を使うとはいえ、広大な畑を耕したり、収穫するのには、相当の手間がかかる。朝早くから、日没後も遅くまでトラクターに乗りっぱなしで作業が続く。また、延々と組み上げられた木製のフェンスや、その縁に積み上げられた大小の石からは、開拓当時の苦労が、ほうふつと伝わってくる。そして、冷たく長い冬には、春の訪れをじっと待たねばならない。

私が表面だけを見て、彼らが、この豊かさを安易にわが物とし、のんびり暮していると思ったのは大きな間違いだった。彼らは、豊かさを手に入れるために、それだけの労苦をつぎ込み、そして、それを懸命に守り続けていたのである。

オンタリオ州ゲルフ大学での集団研修。右端が筆者。

ところで、私がお世話になった一家は、御主人夫婦、三人の子供、それに別棟で暮らしている御主人のおかあさんと弟の七人家族だったが、この一家と共に生活した中で教えられたことが幾つかあった。

そのひとつは、家族同士であっても、お互いの生活・生き方を認め、尊重しあうことである。パーティなどで、夫婦揃って出かけることが、カナダではよくある。そんなとき困るのは、子供の面倒を誰がみるかということだが、私の感覚からいうと、おばあさんに、となる。ところが、彼らはおばあさん自身の生活や仕事を大切にし、大抵の場合、ベビーシッターを雇って、おばあさんの負担にならぬようにしていた。

また、農家の後継者問題についても、寛大である。息子が継ぐのを希望すれば親の農場を買い取って農業を営むことになるし、もし、いやなら、自分の望む別の道を進むことも許されている。

農家では、家族一人一人に役割分担が、生じてくるのは当然のこと。そして、各自が確実にその役割を果していくことが要求される。しかし、時として、それが不可能になることもある。そんな時、彼らのような考えを持って事を進めるならば、すばらしい家庭を築けるのではなかろうか。

御主人が常に探究心を持って経営に取り組んでおられたのも、印象的だった。また、家族の人達が、御主人の考えていることに関心を持ち、周囲から盛り上げようとしている姿も、すばらしいと思った。オンタリオ州での酪農経営は、決して甘いものではない。頭を使わない農家は続かないらしく、土、草、牛、そして機械、設備、加えて事務や売買のことまで、あらゆる分野にわたって、よく研究しているようであった。

農業は、ただ体を動かすだけでは、成り立たない。「真の百姓たれ」という言葉があるが、諸々の業をこなし、種々の知識を得て、初めて百姓となれる、その為に努力せよという意味だと思う。私は、日本から遠く離れたオンタリオの農村で、"百姓"と呼びかけたい人に出会った心境であった。

日加両国は、一九六六年に農業実習生交流計画を発足させ、これに基いて毎年五人前後の実修生が日本からカナダに派遣されている。実習生は、カナダに到着後オリエンテーションを受けたあと、政府が選んだ農家へ送られ、そこで一年間、家族と生活を共にしながら研修を受ける。最近は、ほとんどが酪農実習生。一昨年からは、日本にもカナダから実習生が派遣され、現在二人が神奈川県下の農家に住みこんで花卉と酪農を勉強している。

アルバータ州と北海道も、一九七二年以来、酪農実習生を相互に派遣している。